

史学研究会五月例会

五月二日(土)午後一時より

於 京大史学科第二教室

大化改新の詔をめぐって

岸 俊 男氏

最近大化改新詔の信憑性が再び古代史学界の論点となつてきているので、右に關して二つの問題を限つて日ごろ考へるところを述べる。

一つは改新詔の凡条がいかなる令によつて修飾または造作されているかの問題。試案として大宝令説を提起する。理由は①書紀の編者は、欽明紀の仏教公伝記事の新訳金光明最勝王経による潤色のごとく、新しい資料を採用している。これは孝徳紀の改新詔述作に當つても現行令を用いたことを推定させるが、公伝記事筆録の時期は大宝令施行期であり、欽明紀と孝徳紀は書紀の巻別区分の上でも無縁でない。②第四項の仕丁・采女の庸布・庸米制について、従来は

この庸を歳役の庸と異つて資養物に對して付されたものと考へてきた。しかしかかる資養物の庸はここにのみみえるもので、中国の庸の原義にもそぐわない。従つてこの改新詔の庸は、大宝賦役令に庸を衛士・仕丁・采女・女丁の食糧に充てたとあることを知つての大宝令以後の潤色と考へられる。③同時に庸米が斗で計量されているが、これは書紀・統紀の慶雲期以前の記事にはみられぬことで、淨御原令下では額稻の束把ですべて計上されている。④改新詔の述作者として、孝徳・齊明紀にその入唐記録が引用されている伊吉連博徳の一族が想定されるが、博徳は大宝律令の撰者であつた。そして単に凡条を疑うのみでなく従来ほとんどの人が大綱として認めて来た主文についても再検討を要する点が多いと思ふ。

第二の問題は、改新詔第三項に規定された編戸造籍制に關して、右がすでに大化前代から施行されていたことを説き、改新の諸政策は単に唐制移入の観点のみから考察するのでは不充分で、朝鮮三国との關係を大いに考慮する必要があることを説く。そ

の資料は飛鳥戸・春日戸・史戸など「戸」と「戸」の字を含む氏姓。かかる事例を蒐集すると、①「戸」は決して「部」の代用でなく、特定の氏族に限られること、②ほとんどが帰化系氏族であること、③しかも河内国安宿・高安両郡に分布が集中すること、④飛鳥・春日・橘のごとく大和に特有の地名を冠したものが多くことなどの特性が指摘できる。以上によつて時期は大化前代でありながらなお明確でないが、大和朝廷は朝鮮から渡來帰化した集團を一定地域に定着せしめるため、「戸」の稱を与へ編戸制を施行したと推測される。そして右はまず河内の要地である阿郡域で始められたと思ふ。かくて日本における「戸」および編戸の源流をここに見出したのであるが、それが朝鮮三国においてどうであつたかがつぎに重要な問題となるが、現状では明確な解決はえられない。

なお詳細は近刊の三品彰英編『日本書紀研究』および日本歴史十月号収載予定の論文を参照されたい。(岸)

山西商人における利潤の実現形態

寺田 隆信氏

山西商人とは、山西省出身の商人及び金融業者の総称で、明代から清代にかけて、中国商業界の一方の雄として大きな勢力をふるった商人の集団をいう。彼らの興起については、明朝と結んで政商となった事、特に、蒙古との戦争における兵站部門をうけもった事に、その要因が求められているが、彼らの利潤追求の具体的形態を明らかにする事が、この報告の課題である。

ところで、私は、この二・三年来、明代における北辺の軍餉問題、辺餉問題を追求して来たが、それは、「対蒙古作戦の兵站部門をうけもつ事によって大をなした」といわれている、山西商人の活動舞台を明らかにする目的をもっていた。即ち、明朝の辺餉政策は、正統年代を調期として、旧来の現物を中心とする体制から、新たな銀貨を中心とする体制へと転換するが、これは、国家的意志のみによって、現実を無視して実行できる性質のものではなく、基本

的には、当該社会における農業生産力の一
定の発展と、その表現としての商品生産・
商品流通の展開という現実を反映したもの
と考えられる。つまり、辺餉政策の転換に
よって、北辺地方においては、銀貨による
商品―米穀や棉布などの購買が、辺鎮当局
の手によって大規模に実施されるようにな
ったのである。それは、政治的・軍事的な
要請が他の一切に優先する市場ではあつた
が、そこにこそ、山西商人の最も主要な活
動舞台が見出されるのである。「対蒙古作
戦の兵站部門をうけもつ事によって大をな
した」というのは、具体的には、以上のよ
うな機構をもつ取引市場に、彼らが参加
し、そこから、莫大な利潤をえた事に他な
らない。

さて、北辺における最大の市場は、米穀
を中心とする食糧取引をめぐって形成さ
れた。辺鎮当局は、様々の形態によって送
られた銀貨によって、大量の米穀を購買し
たが、北辺の米価は、時代とともに騰貴す
る傾向にあつた。換言すれば、通貨として
の銀の購買力は、年をおつて減退しつつあ

つたが、こうした米価の騰貴現象は、辺餉
政策や軍人の個人的生活にも重大な影響を
及ぼすとともに、商人にとっては、その利
潤をより大きなものとするための一般的条
件となつた。

米穀取引市場から商人に利潤をもたら
す第一の機構は、穀価に生ずる地域差であ
るが、蕭彦の敬陳末議以備采択以裨治安事
(文編卷四〇七)によると、榆林鎮と所屬
の定辺營とは、四日行程の距離にあるが、
兩処間の米価の差は、三乃至五倍にも達す
るとみえている。また、その第二の機構と
して穀価の季節的変動があげられる。一般
に、穀価は、收穫直後に最も安く、收穫直
前に最も高くなるが、実録嘉靖四四年五月
壬戌の条にもみえる、万恭の条陳三辺通変
等疏(文編卷三五二)によれば、八月「收
穫の頃には、銀一兩で米二石を買えたのが、
十月頃には一石八斗となり、翌年二月頃
は一石四斗しか買えなくなるといつている。
こうした季節によって生ずる穀価の差額も
また、商業利潤実現のための要件となる。
しかも、このような価格差をより大きくす

るために、商人は、直接生産者から米穀を買入れる場合、「青田買い」や高利前貸しなどの方法によって、出来るだけ安く、出来るだけ確実に、米穀を入手する事に努めている。安く買うならば、それだけもうけは大きくなったはずである。

このように、その利潤実現の主要形態が、穀価における地域差や季節差の利用など、不等価交換による差額の取得であり、それらが、本質的には、屢々、偶然的・恣意的なものである以上、そこに経済外的な諸契機の介在も避けられない。商略・詐欺・暴力などがそれであるが、公金横領、度量衡の不備につけこむ詐欺、低品質貨幣による実質的価値以下の購買などの諸行為が事実として伝えられている。更に、最終的には、独占の問題があるが、それは、多く、政治権力と結びついて、特権としてあらわれてくる。

占についてみると、彼らが、中央・地方の有力官僚と結ぶ事によって多くの便宜を与えられた事とともに、当局による米穀商人の資格制限の動きのなかに、独占成立への契機を認める事ができる。それを最もよく伝えているのが、劉世節の編する劉忠宣公（劉大夏）年譜にみえる、弘治十年の記事である。

以上のように、北辺において最大の市場規模をもった米穀取引市場のなから抽出される商人の利潤は、米価における地域差や季節差を利用するとともに、直接生産者に対する青田買い・高利前貸し、更に、商略・詐欺・暴力をともしなう諸活動、はては、政治的権力と結びついた市場独占などによって、もっぱら、流通機構のなから実現されたものであった。つまり、それは、商業利潤及び高利貸利潤の性格をもつ。商人が米穀生産に直接関与した事例としては、商屯の存在が知られているにすぎない。したがって、彼らの利潤実現形態は、主として、直接生産者たる農民や屯軍から、出来るだけ安く米穀を買い入れ、政府に出来る

だけ高く売りつけ、その差額を銀によってうけとると言う一連の過程のなかにあらわれたと断定できるのであって、山西商人は、こうした経済機構のなから発展して来たのである。（寺田）

史学研究会六月例会

六月六日（土）午後一時より

陽明文庫見学会

（講師）上横手雅敬氏

学界消息

読史会

五月例会 五月九日（土）午後

於 栗友会館（以下同）

東北地方の銀山開発

小葉田 淳

六月例会 六月十三日（土）午後

戦国時代の村役人

村田 修三

——毛利氏の領国における刀禰・公文・散

使について——

昭和三十九年度春季大会

六月二十一日（日）午前九時半—午後五時

戦国大名島津氏について

稲本 紀昭

儒教の自己変革と民衆

——大塩平八郎について——

第一次大戦後の選挙法改正問題

職員団の倭国使をめぐって

「四天王寺御手印縁起」の性格について

伏見城下町の建設について

アメリカにおける日本史研究の近情

最近における平安宮史跡調査の所見

逆修

〈特別公演〉

難波の宮大安殿について

国際歴史学会京都部会

さる四月十七・十八日の両日、東京（東京大学

安田講堂）で、国際歴史学会本部事務局会

議（理事会）が開催され、来年ウィーンにて開

かれる第十二回国際歴史学会議の組織・運営が

審議された。そのあと、参加理事が関西にも来

遊され、四月二十四日（金）午後、京都大学、

同志社大学及び関西日仏学館で、次の分科会が

開催された。因みに、国際歴史学会委員会は、世

界各国の歴史学国内委員会（日本では学術会議

宮城 公子

松尾 尊亮

上田 正昭

野田 只夫

梅浜 昇

歴史学研究連絡委員会）と、歴史学関係の国際

的諸団体の代表委員によって構成されている人

文社会係では最大かつもっとも有効的な国際組

織であり、第二次大戦後、第十回会議（一九五

五年、ローマ）で日本の復帰が認められ、第十

一回会議の委員会総会で本部事務局構成員（理

事団）に選出され、今回、日本でははじめての

理事会開催となったものである。

イギリス一五世紀の研究

アーネスト・F・ジェニョブ教授（オクスフ

ールド）

イタリヤ中世史研究の動向

ラファエロ・モルゲン教授（ローマ大学）

東南アジアにおける民族解放運動

A・A・グーベール教授（科学アカデミー、

モスコウ）

ジョン・ローの近代性

ポール・アルサン教授（リエージュ大学）

ナショナリズムの歴史

ボイド・C・シエーファー教授（マカレス

ター・カレチ）

フランスにおける史料研究の現状

（於 同志社大学）

（於 関西日仏学館）

ミンセル・フランソア教授（ソルボンヌ）

芸能史研究会大会

四月二十五日 於 京都大学薬友会館

〈研究発表〉

古代宮廷儀礼の社寺祭祀化

——殊に祇園御霊会の駒形権児をめぐっ

て——

大和猿楽と複式夢幻能の成立

舞々と初期歌舞伎

「耳庵集」の成立

利休・織部・遠州

〈講演〉

民俗芸能の舞台化

——作品「火の鳥」を一例として——

日本考古学協会第三〇回総会

五月二日・三日

丹生遺跡第八地区出土の石器について

小林 知生

本州島西端部の海岸段丘と無土器文化層

（第一報）

ローム層内に於ける石器製作址の調査

——長野県伊那市御園尖頭器遺跡——

小野忠熾・河野通弘

鹿角製釣鉤の製法を示す二・三の資料について

林 茂樹

金子 浩昌

宮崎県東諸県郡綾町尾立遺跡の調査

賀川光夫・鈴木重治・後藤重巳

奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査概報

三島 格・永井昌文

北海道統縄文化編年の新資料について

——北檜山兜野遺跡第一次調査報告——

千代 肇

千葉県天神前遺跡における弥生時代中期の墓址

杉原莊介・大塚初重

千葉県天神前弥生時代墓址発見の人名について

鈴木 尚

静岡県佐久間町平沢における弥生集落の調査

長田 実・平野和男

鉄製鋳を出土した宮城県宮戸島貝塚寺下囲遺跡

加藤 孝・小野 力

玉作の工房——千葉県成田市花内玉作遺跡の

場合——大場磐雄・寺村光晴

筑後岩戸山古墳石人石馬の調査

小田富士雄

石製地表飾を伴なう古墳の新例

岡崎敬・坂本経堯・松本雅明

乙益重隆・三島 格

新沢千塚二次調査概要

森浩一・網干善教・藤原光輝
小島俊次・伊達宗泰

帯金具並びに墨書土器出土の宮城県松山町亀井

囲横穴古墳群

氏家 和典

植輪祭式土に占める意須比着用女子植輪像の位

置 飛鳥京跡(昭和三十八年度)の調査

水野 正好

大阪府箕面市勝尾寺隠示八天石蔵の調査

藤井 直正

長野県八重原及び若宮古窯跡の調査

——千曲川流域古窯跡の調査(Ⅰ)——

坂詰 秀一

尾張国知多郡横須賀町権現山古窯址の調査

杉崎 章・広瀬栄一

福島市腰浜院寺及びその瓦窯址の調査

伊東信雄・内藤政恒・梅宮 茂

石背 上人壇庵寺跡発掘調査

伊藤玄三

奈良県五条市靈安寺塔跡の調査

小島 俊次

長野県霧ヶ峰旧御射山祭祀遺跡について

横井清彦・金井典美・石井則孝

越後国江上郡址発掘での新知見

奥田 直栄

九州の装飾古墳の孤直文について

宇佐晋一・斎藤和男

社会経済史学会大会 五月九日、十日

自由論題報告

於慶応義塾大学

徳川期における「国益」思想について

——盛岡藩と宇和島藩の事例——

藤田貞一郎

大隈財政における財政金融政策

中村 尚美

河内棉作地帯の耕地利用

葉山 禎作

明治期東京府下における農民の階層分化と農業

生産 須永 芳顕

明治前期における地方銀行と製糸業

池田 正孝

中国における階級区分論の生成

——毛沢東研究序説——

今堀 誠二

清末江蘇地方における農村社会

小林 一美

イギリス中世都市の基本的性格

武居 良明

十三世紀におけるイングランド封建制の展開に

ついての一考察 森岡敬一郎

ロシア革命が我國の北洋漁業経営に及ぼした影

響 三島 康雄

十八世紀におけるイギリス経済の構造

——産業革命と農業革命との同時併進性の

問題をめぐる——

楠井 敏明

フランスにおける「締調運動」の特質

湯浅 起男

西南ドイツ繊維工業における機械制工場の成立

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

湯浅 起男

——「三月前期」のヴェルテムベルクを中
心に—— 柳沢 治

プロイセンにおける「初期独占」展開の原型
——個人金融業者 Firna Splitgerber
& Daum の経営分析—— 肥前 栄一

ドイツ産業革命期におけるライン綿工業の発展
とその問題点 渡辺 尚

〈展覧〉故野村兼太郎博士・慶応義塾図書館及
び斯道文庫所蔵の社会経済史に関する古文書・
資料

共通論題報告（五月一〇日）

テーマへヨーロッパ封建社会の諸問題

総括

ドイツにおける封建社会史研究の諸問題 矢口孝次郎

フランス封建制の諸問題 山田 欣吾
イングランドにおける世俗領の経済構造 鯖田 豊之

ビザンツ封建制の諸問題 鵜川 馨
渡辺 金一

歴史学研究会大会 五月一六・一七日

総合部会（五月一六日） 於 早稲田大学

〈東アジア歴史像の検討〉

太平洋戦争の世界史的意義

荒井 信一

歴史教育における戦争の問題 加藤 文三
分散会（五月一七日）

A 古代へ九・一〇世紀の東アジア——新階層の
出現とその歴史的位置——
（朝鮮）新羅末・高麗初期の豪族 江原 正昭

（中国）唐中期以降に於ける商品経済の発展
と地主経営 草野 靖

（日本）八・九世紀における帰化人身分の再
編 平野 邦雄

B 中世へ領主制の再検討

中世村落の構造把握のための理論的試み

惣的結合の歴史的位置 島田 鏡一

一向一揆の基礎構造 関口 恒雄

C 近世へ豊臣政権の歴史的位置 新行 紀一

豊臣政権の構造 山口 啓二

豊臣政権の基盤 朝尾 直広

D 近代へ資本の政策と諸階級

イギリス古典学派の経済構造論

——自由主義段階政策—— 山之内 靖

転換期ドイツの経済政策——「結集政策」
と自由思想連合—— 大野 英二

明治末期における独占資本主義の成立と性格

——明治三十年代における独占化と経済

政策—— 森 芳三

E 現代へ帝國主義と人民——第二次大戦前後
を中心に——

中国革命と人民民主統一戦線 古島 和雄
ロシア革命における民主主義と統一戦線

日本における人民戦線について 和田 春樹
神田 文人

日本西洋史学会第十五回大会

五月二十二、二十三日

〈公開講演〉 於 明治大学駿河台校舎

ギリシアにおける歴史意識の展開

ルネサンスについて 原 随園

歴史認識における二つの途 大類 伸

〈研究発表〉 林 健太郎

古代史部会

ダウイド王国形成に関する若干の問題点

——ダウイドの人間像—— 三笠宮崇仁

エピタピオス考 池田 忠生

在留外人の訴訟能力について 馬場 恵二

キケローの政治思想 浅香 正

ナザレ碑文（S. E. G. VIII. 1. 13）の一考察

秀村 欣二

中世史部会

古代・中世の移行期に於けるマニ教の動向について

須永 梅尾

早期アングロ・サクソン社会の自由人

青山 吉信

中世ヒューマニズムと修辭学

鈴木 成高

中世末期フランスにおける農民保有権

——ニヴェルネ地方のボルドラージュ(Bordelage)をめぐる——

木村尚三郎

ノヴゴロドの民会について

田中 陽児

人文主義者の平和共存策

渡辺 友市

——ペトラルカの場合——

中村賢二郎

近・現代史部会

連邦派の勢力失墜

三浦 進

スコットランド歴史学派の思想的地位

水田 洋

身分制国家の「二元性」について

成瀬 治

チャーティストとアイルランド問題

古賀 秀男

ビョートル時代の製鉄マニユにおける労働力の問題について

——オロネット地方の官営工場の場合——

米川 哲夫

ナチズムの諸問題

吉田 輝夫

西独史学界におけるナチス観の問題

村岡 哲

トレルチ没後四十年

西村 貞二

日本地理学会一九六四年春季大会

四月三・四日

於 東京大学教養学部

文献論考

今村 学郎

二つの環境論——ヒューマンエコロジーの基礎理論構成のための検討——

岡田 真

農業経営形態の変質に関する試論

深沢富二雄

——岳南地域の場合——

東京湾沿岸の旧塩田と土地造成について

小沢 利雄

大阪市近郊低湿地における土地利用に関する二、三の考察

高木 幹雄

水稲北限地における土地利用の変化

岡本 次郎

高須輪中の低湿地における土地改良の問題点

松原 義継

久慈川・那珂川沿岸平野の微地形と条理遺構の分布

籠瀬 良明

中央高地における企業的牧畜

徳島県のリンゴ栽培

たばこ作からみた日本農業の地域的動向について

信濃川下流右岸地域の農業水利の発達

わが国畑地灌漑の地理学的研究

無人島地図に関する考察

地形図の図法について

東京地図について

中部山村における郡界の変更

人工林化の進展度より見た関東山地の林業

愛媛県南予津島町の製炭形態

三重県以外における真珠養殖の地域構造

漁業の発達と生産地魚類市場の展開

南九州の漁協自営マグロ遠洋漁業

国土開発縦貫自動車道路に伴う地域経済の変化

自動車交通を指標とした日本の地域区分

中央高地における企業的牧畜

徳島県のリンゴ栽培

たばこ作からみた日本農業の地域的動向について

信濃川下流右岸地域の農業水利の発達

わが国畑地灌漑の地理学的研究

無人島地図に関する考察

地形図の図法について

東京地図について

中部山村における郡界の変更

人工林化の進展度より見た関東山地の林業

堀内 義隆

市川 健夫

岡本 啓志

横田 忠夫

磯部 利貞

中島 隆広

木村東一郎

金沢 敬

清水 靖夫

矢ヶ崎孝雄

山崎寿雄他

立石 友男

篠原 重則

小栗 宏

大崎 晃

土井 仙吉

奥野隆央他

有末 武夫

中庭式閉鎖型屋敷構の分布とその系譜

佐藤甚次郎

農業人口の性比に関する地域的研究——名古屋

光岡 浩二

屋外吉田部落の場合——

齋藤 光格

農家人口の農外就業からみた村落の型

林 正巳

都市格差の考察

伊藤 達雄

人口指標による広域都市地域の西定

石水 照雄

東京大都市地域における人口の分散と郊外化

柳田 長士

福岡市における都市化研究

坂口 良昭

ニューヨーク東京両都市圏、都市化の地域構造

服部鍾二郎

論的比較

山口守人他

東京における経済的管理機能の集中

太田 勇

埼玉県における明治初期の繊維産業

宮坂 正治

長野県における工業の変化

北村 嘉行

三木刃物工業の地域集団化とその内部構造について

渡辺 四郎

福島県内陸地域における工業

山口守人他

岳南地方の工業化

太田 勇

内陸地帯の工業立地と地域計画——長野県松本・諏訪地区を対象として——

宮坂 正治

富山平野における工業立地の動向——とくに

内陸部の電気部品工業を中心に——

竹内伸一他

自動車工業を中核とする内陸工業地域の形成

——愛知県豊田市の場合—— 栗原 光政

旧軍用地の工場への転用について——関東地方の場合——

宮木 貞夫 丸井 博

常磐炭の市場形成

工場物資の流動からみた横濱市の工業について 藤原 佳子

その他応用地形ソソジウムおよび地形・水・営

力・気候・動物地理に関する諸発表が行なわれた。

朝鮮学会 第一五回大会 六月六日、七日 於 大阪市立博物館

六日

〈討論會〉

古代の日本と朝鮮

有光 教一

河野 六郎

村上 四男

司会 三品 彰英

宮田 節子

〈公開講演會〉

大阪と朝鮮

三品 彰英

朝鮮の美術

森 暢

七日

〈研究講演會〉

朝鮮通信使の見た大阪

中村 栄孝

終戦後韓国における遺蹟・遺物の調査について

梅原 末治

〈研究発表會〉

李朝後半の庶民小説について

大谷 森繁

従軍僧慶念の「朝鮮日記」について

内藤 篤輔

「朝鮮送使國次之書契覚」の史料性格について

長 正統

「おふせん」論考——孤草島釣魚に関する一考察——

長 節子

日韓両語親族語彙対応・不对応の問題

——アルタイ比較民俗言語学の立場から——

長田 夏樹

欽明朝における百済の対倭外交

——特に日系百済官僚派遣をめぐる——

——特に日系百済官僚派遣をめぐる——

——特に日系百済官僚派遣をめぐる——

——特に日系百済官僚派遣をめぐる——

——特に日系百済官僚派遣をめぐる——

——特に日系百済官僚派遣をめぐる——

——特に日系百済官僚派遣をめぐる——

——特に日系百済官僚派遣をめぐる——

的初等教育施設の転身相

韓國の歴史教育

渡部 学
宮原 兎一

朝鮮民主主義人民共和国における農業共同化運動
樗村 秀樹

在日朝鮮人に関する歴史的考察

朴 慶植

在阪朝鮮人運動史

岩村登志夫

最近の朝鮮史観をめぐって

——「大東亞戦争肯定論」と「日韓合邦論」

を中心にして——

対訳日韓辞典について

中瀬 寿一
青山 秀夫

委員会だより

◇ 依然として約二ヶ月発行が遅延しておりますことを、おわびいたします。各位のお叱りをお待ちでもなく、委員会としても鋭意努力しております。五号は引き続きお届けし、六号にてほぼ定期刊をとり返す予定ですので、今しばらくのご辛忙をお願いいたします。

◇ 別面所報の通り、来る十一月一日・二日本年度大会を開催いたします。お誘い合せの上多数ご参加下さいますよう、お待ちいたします。第一日の見学会、本年は趣意をかえて古墳の見学会といたしました。参加ご希望の方、なるべく早い目にお申込下さい。

◇ 前号に同封いたしましたアンケート、必ずご返送願います。なお、郵送料当金負担の期限が一月一五日で切れますので、以後お差出しの方は、お手数ながら切手をおはり下さい。

隔 葉 記 第五

自万治四年 至寛文四年

A5判約七〇〇頁 口絵二葉

頒価 二、〇〇〇円(据置)

送料二二〇円

待望の第五がいよいよ発刊になりました。しかも、最近の印刷費の異常な高騰にもかかわらず、頒価は据置きです。お申込は公共機関以外は必ず前金にて、郵送希望の場合は送料を添えて下さい。

発 行 鹿 苑 寺
発 売 元 史 学 研 究 会

一九六四年六月二五日印刷
一九六四年七月一日発行 定価二四〇円
史 林 (第四七巻第四号)

発行所 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
史 学 研 究 会

理事長 田 村 実 造
振替京都五一五五番

印刷所 京都市下京区西七条御所ノ内町五〇
中村印刷株式会社